

平成三十年八月投句

炎帝に蕾を焼かれ佇つカンナ

青葡萄石橋あまた残る郷

遠花火遅れる音の懐かしく

勝利

白粉花や軒に置かれし猫車

由紀子

車椅子寄せし秋桜今年また

そそり立つ崖に靈堂秋のこゑ

白粉の花に社宅の子の寄りて

宝箱底に登山のバッジあり

光子

【お休み】

節子

炎帝につきて耿耿火星出づ

川石に動かざる鵜や秋暑し

腹白く蜥蜴の骸らしきもの

真理子

火星見て土星分からずくつわ虫